

研究ノート

花手水が生みだす新たなコミュニティ ― アクターネットワーク理論から考察する異種混交的なネットワーク

A New Community Created by HANACHOZU—Hybrid Networks based on Actor-Network Theory

金山智子(IAMAS教授) 工藤麻里(IAMAS修士1年) 小林玲衣奈(IAMAS修士1年)
KANAYAMA Tomoko (IAMAS) KUDO Mari (IAMAS) KOBAYASHI Reina (IAMAS)

キーワード 花手水, アクターネットワーク理論, 異種混交的なネットワーク, 地域コミュニティ

Keywords HANACHOZU, Actor-Network Theory, hybrid network, local community

1. はじめに

寺社を参拝する際には手や口を清める手水(てみず、または、ちょうず)と呼ばれる風習があり、どの寺社にも入り口、参道、あるいは社殿の脇に手水をおこなう手水舎が設置されている。参拝者は、手水舎に置かれた柄杓を使い、清めの作法に従い手や口を清める。2016年頃から、いくつかの寺社が手水に花を浮かべるようになった。例えば、奈良県の岡寺では2016年から手水に牡丹を入れ、愛知県の御裳神社は2017年から紫陽花を手水に浮かべている。京都府の柳谷観音では、2018年頃から、これを「花手水」と名付け、Instagramなどのソーシャルメディアで頻繁に発信していった。色とりどりの“SNS映え”する花手水の写真は大きな話題(いわゆるバズる)となり、これを契機に注目されるようになった。

2020年冬、新型コロナウイルス感染症(以下コロナ)が世界的に拡大し、対人接触による感染防止の目的で人々の集まりや移動を制限する措置がとられた。葬儀や法要、拝観や祭りなど、人の集りを習慣的に行なう寺社にとっても、コロナの影響は極めて大きく、拝観時間短縮や催事、御朱印や物販中止などから、参拝者数やお布施が減少した(全日本仏教会, 2020; 埼玉県神社庁 2020)。この状況下、疫病退散や平和の願いを込めた護符や御朱印の頒布や、参拝や祭りのオンライン配信を行う寺社が増えていった(黒崎, 2020)。

コロナ禍で、感染防止のため手水が使えなくなったことは、花手水を始める“理由”となり、花手水を行う寺社が増えていった。地元の花屋で売れ残りの花が活用するなど、“SNS映え”だけではない新たな地域への広がりもみられる。現在では大宰府天満宮、東福寺、北野天満宮をはじめ、全国で200～300にのぼる寺社が花手水を行っており、超宗派の連携や地域での新たな繋がりも生まれている。寺社を核とし市内の商店等にも花手水を飾る地域も現れ、新しい地域活性の手法としても広がりをみせている。

本研究では、花手水の取組みを通じた地域コミュニティや

ネットコミュニティとの新しいつながりに注目しており、アクターネットワーク理論を援用しながら、新たに生まれたコミュニティとこれからの寺社のあり方について考察していく。

2. アクターネットワーク理論と地域コミュニティ

1980年後半、社会構築主義と技術決定論への批判的立場からLatour (2005)・Callon (1986)・Law (1986)によって提唱されたアクターネットワーク理論(以下ANT)は、「社会」を本来社会的でない行為者間の関係によって形成される不安定で刹那的な現象であると捉え、地球上のほとんど全ての存在(人間、他の動物、植物、菌類、無生物)は、それらの間に築かれた関係によって社会的世界を構成し、多様な現実を作り出すと主張してきた。社会は、人間と非人間的な行為者がネットワーク化(つながりや関係)の実践の過程で相互に形成、変換、翻訳し合うことで構成されており、人・モノ・自然のハイブリッドな集合体(異種混合体)から社会を把握するネットワーク理論でもある。モノや自然にも行為能力(エージェンシー)があり、行為者(アクター)、或いは行為体(エージェント)と位置付ける。ハイブリッドな集合体は多様なアクターの潜在能力を結びつけ、それにより技術、モノ、制度といったイノベーションが創案、開発、使用されていく(カロン, 2006)。

Callon (1986)は、アクター・ネットワークの形成、変容、崩壊する過程を、問題化、関心づけ、取り込み、動員のモメントからなる動的過程として理解できることを事例分析をもとに解説する。問題化では、主要なアクターが目的達成のために他のアクターを挙げて定義する。アクター間で異なる問題の所在を明らかにし、主体アクター自身がそれらを調整することが求められる。関心づけでは、定義されたアクターが他のネットワークに転じることを防ぐため、具体的な関心装置として新しいアクターを導入する。具体的なアクターを通

じて、問題調整の役割が示される。取り込み段階では、様々な利害関係によって作られた関係がより強固になり、すべてのアクターによって受け入れられる。主役の利害は、他の条件の変化によって覆されることもあり、粘り強い交渉が必要となる。動員段階では、合意された利害関係を行動に移す。

Latour (2005) が述べているように、ANTは理論であると同時に、方法論としても適用可能であり、現在では技術社会分野以外にも、経済、教育、開発、情報など様々な分野でANTが理論や方法論として用いられている。地域コミュニティの関連分野においては、数は少ないが、既存のコミュニティ論や都市論などとは異なる見方や理解を求める研究者たちがANTを援用し、調査や分析を行なっており(例えば、小松, 2007; Wissink, 2013), 本研究もそこに位置付けられる。

3. 研究課題と調査方法

3.1 研究課題

本研究では、アクターネットワーク理論をもとに、花手水はどのようなつながりから生まれ、そしてどのような新しいつながりを生み出しているのか、という研究課題を設定した。

3.2 研究方法

ANTでは、研究対象となる事例に関して、そのつながりを中心に詳細に観察していくことが求められる。本研究では、花手水の先駆けとされる楊谷寺(京都府長岡京市)と、本学が所在する岐阜県で花手水を実施している南宮大社(岐阜県不破郡垂井町)の二つを事例対象とした。調査は2021年6月から12月まで、各寺社において参与観察を実施し、関係者らへのインタビューを行った。

また、参拝者たちや花手水に関心のある人たちのつながりを考察するために、SNSで花手水が投稿され始めた2017年から2021年8月までにメディアで露出された花手水関連の記事および各寺社による花手水に関するSNS投稿も分析した。

4. 事例研究とメディア分析

本研究では、まず二つの事例について、どのようなアクターやエージェントのつながりから花手水が始まり、そして、花手水から新たにどのようなアクターがつながり、何が生まれているのかを記述していく。その後、メディア分析についてもみていく。

4.1 事例1—柳谷観音・楊谷寺

京都府長岡京市にある柳谷観音・楊谷寺は花手水の先駆的存在と言われる。2017年、寺の執事(住職の妻)の日下恵氏が文化財である庭に花を植えることができず悩んでいた時、贈答用の箱に入った花を真似して、手水に紫陽花を入れてみ



た。それが「すごく可愛かった」ことから、その写真をFacebookやInstagramに投稿した。過去の投稿にコメントがついたことは殆どなかったが、花手水の投稿には珍しくコメントがつき、自分たちのSNSが見られていることを認識した。花手水を始めて間もなく、それを「花手水」と呼び始めた。本来、花手水は「野外の神事で水のない時に草花のつゆで手を洗う」という意味だが、それを知らなかった執事が花手水と名付けた。住職からこの間違いを指摘されたが、「もう使っているし、

分かりやすい」と気にせず、「花手水」をタグ付けした花手水の写真を頻繁にソーシャルメディアで発信していった。

花手水を見た人たちがTwitterでバズる（話題にする）ことで、県外からカメラを持って見に来る人たちが増えていった。花の少ない冬季になっても花手水を見に来る人たちがおり、花手水がなくて残念がる参拝者の声から、「花手水がいつも見たい」という人々の期待に応えることにした。それは、季節の花以外に、クリスマス、干支、バレンタインなど人々に馴染みのある行事や、鳥や蛙、金魚や小動物など、見る人が「楽しい」「綺麗」「可愛い」などと感じてもらえるデザインを考案していく契機になった。

花手水は主に執事が制作するが、住職が制作するものもある。花は自分たちで調達するものや寺社に生息する草花、寄付されたものなどを使用する。小物などは、執事がイメージするものをメルカリなどで探して購入する。いろいろと工夫された花手水はさらに花手水のファンを増やし、SNSのフォロワー数も増加していった。柳谷観音では、Instagramへの投稿は毎日行い、コメントには返信をするなど、フォロワーとのコミュニケーションは執事の日課となっている。

全国でも数少ない神仏習合が残った柳谷観音の広い境内には、本堂や奥之院、阿弥陀堂など多くの寺社がある。手水舎や手水鉢も多く、龍手水、庭手水、恋手水、琴手水、苔手水と名付けられた手水は、境内の主要な建物を廻る経路に位置しており、その時々で、花が浮かべられる手水が異なり、来る度に変化を楽しめるように工夫されている。

柳谷観音の花手水は、桜や紅葉のツアーがマンネリ化し、それに替わるものを探していたJR東海の目にも止まった。ツアーの企画を打診された執事は、当時、京都でも花手水を実施している寺社は少なく、ツアーにならないと思ったが、JR東海が他の寺社にも花手水の実施を依頼していき、北野天満宮や二尊院などの有名な寺社が花手水を開催することになった。有名な寺社が花手水を行ったことは花手水が広まる上で影響があったと執事は評価している。「そうだと京都、いこう」というメジャーなツアーになったことも、花手水の広がり貢献している。ツアー対象となっている寺社の花手水には、「そうだと京都、いこう」と刻印された柄杓が置かれている。

花手水が増えていく中で、新たに始めようという寺社から、「花手水はどのようにやるのか」「こんな感じでよいのか」と執事に相談がくることも多く、LINEで自ら作った花手水の写真を送ってくる住職もいる。花手水を実施している寺社同士が互いにフォロワーとなり、情報交換したり、共同に企画したりと、宗派や地域を超えたつながりも生まれていった。また、寺のフォロワー数が多いことから、コロナ禍で少しでも地元の商店が活性するようにと、各商店の花手水の写真を

寺のSNSで発信し、参拝者たちに向けた地域のPRにも一役買った。寺の手水舎でなくても、皿や鉢に花を浮かべて花手水を真似ることができることから、インスタを通じて自宅ですぐにお花を浮かべて簡単にできる「#おうちで花手水」や、「#花手水バトンリレー」などの取り組みも行っている。

柳谷観音は不便な山奥に位置するが、平日でも若い女性や親子連れなどが訪れ、熱心に花手水の写真を撮っていた。花手水以前から、柳谷観音では御朱印ブームもあり、押し花をあしらった朱印が人気となり、押し花朱印づくり教室は常に満席となっている。平安時代より、眼病平癒の祈願所として1200年の歴史を誇る寺としては、観光寺となることに対しては否定的な考えである一方で、参拝者が減少している状況で、莫大な寺の修繕費や今後の運営費用を考えた場合、観光に取り組む必要性には否が応でも直面しており、その線引きに苦慮している。「花手水はツールやと思うんですよ。生きていく不安というのは生きていたらずっとつきまとうし、やっぱり心の支えになるような活動をお寺はしていけないといけない」と執事は話しているが、今後、もっと参拝者の心の救いとなる場としての役割が必要であり、そのための活動や取り組みをしたいと考えている。「お寺って楽しいところですね、って言われたのは初めてでした」という参拝者の言葉は、柳谷観音が参拝者に楽しいと感じてもらえる企画を考える原動力になっている。

花手水や御朱印などで参拝者の数も増え、特に若い女性など、これまでの参拝者とは違ったタイプの人たちが訪れるようになったことで、逆にこれから柳谷観音の伝統行事に再度目を向けていこうと考えている。「大事な伝統行事の日に、柳谷観音に癒されに来る人たちが一緒に数珠繰りをしたら、きっと心が満たされると思うんですよ」と話すように、これまで連綿と続けてきた寺の伝統文化も、今ならば楽しく取り組めるかもしれないと、現在やめている百万遍大数珠繰りを復活させることも検討している。そして、癒しを求める人たちにとって、やはり住職の講話が一番必要だと思っている。ただ、これまでの「有難いお話」を聴かせるというのではなく、こういった新しい参拝者たちが「癒された」「元気になった」と感じる話になるような工夫が必要だと考えている。

4.2 事例2—南宮大社

岐阜県不破郡垂井町にある南宮大社は、鉄鉾を司る神の金山彦大神を主祭神とした全国の鉾山・金属業の総本宮として古くから信仰を集めている。「南宮さん」として親しまれている広い境内には、奉納された鉾や包丁、鉬や鉈などの鉄器や金属製品が飾っており、金属の神様らしさを感じさせる。

2019年に、新しい宮司から何か新しい事業をやりたいと、地元の氏子に相談があり、氏子の妻がSNSで見た滋賀県大津

市の日吉大社の花手水を提案した。参拝者減少が一つの課題となっている神社では、「まずはやってみる」ことにした。2019年11月から、毎月1日と15日に開催される月次祭に合わせて開催されることになった。

始めた頃は、手水にどのように花を立てたら良いのか、保存会の人たちと宮司・職員と一緒に考え、竹に穴を開けたものや瓶をもちいるなど試行錯誤しながら手作りしていった。結果、ステンレスの型を作ってもらい、それを用いて花を生けるようになった。

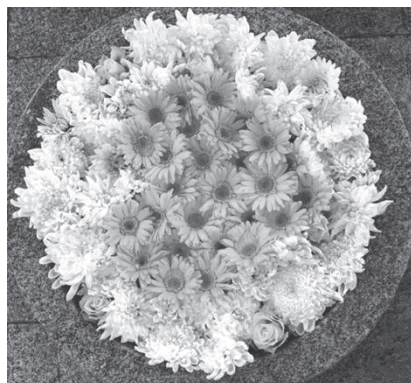
当初から、南宮大社ではInstagramを使って、花手水の写真を配信していた。当時は、権禰宜の荒井寛巨氏が撮影担当で、夜遅くまで何枚も撮影した中から選んでアップしていた。現在は女性職員が撮影と投稿を担当している。SNSを通した情報発信は、神社にとって重要だと位置付けている。花手水を始めてから、「インスタ映え」の効果もあり、若い年齢層（特に女性）が増えていった。

2017年12月より始めたInstagramの「いいね」数は常に100未満だったが、2019年11月に花手水を始めてからは徐々に増え、2021年5月の花手水の投稿では300を超えた。フォロワーのコメント数は変わらないが、大社の投稿内容は、「手水舎横の石臼にてカエルさん達がお出迎えてしておりますが、手水舎の方にも何匹かカエルさん達が仲間入りしましたので、ご参拝の際は是非御拝観くださいませ」といった柔らかなトーンの楽しいものが増えていった。現在フォロワー数は1400を超え、花手水を通したコミュニケーションは活発になり、大社の職員だけでなく、花手水を制作する氏子メンバーもフォロワーからのリアクションは全てチェックしている。南宮大社の花手水が根付いたことは、「南宮大社」とネット検索した際に「花手水」が検索候補で出てくることで実感していると話していた。

愛知や三重など県外から見に来る人も増えているが、「花手水やり始めたから朝インスタ見て、来ようってなる様になった。夜9時まで開いているし、前よりも来る回数増えた」と地元の人が話していたが、気軽に来て楽しめる機会や時間が増えたことで、地元の人たちが参拝する頻度は増えていった。

参拝者の多くは、正面から入り花手水の写真を撮り、参拝して、さらに北門の花手水に行って写真を撮り、また正面の花手水に戻って写真を撮り帰る、という経路を取っていることから、花手水が新しい参拝ルートの重要な位置を占めている。

宮司は花手水を評価しており、自らもデザインに加わる。さらに鉄の神様とは違うイメージに変化させていくため、様々な取り組みを始めた。花手水の日限定の「花手水奉拝証」の頒布したり、花手水呈茶を振舞ったり、2021年7月からは「花守り」の頒布も始めた。また、手水舎の天井に風鈴を飾るだ



けでなく、2021年夏からは若い職員たちの提案で風鈴亭を設置、参拝者が花手水以外にも楽しめる空間を作った。

「新しいアイデアがあれば形にしていき、少しでも皆さんに神社に目を向けていただきたい。伝統を壊さない中で皆さんに喜んでいただけることを模索しながら」と権禰宜は話していたが、2021年秋には、花手水の日・の夜間参拝に合わせた新しい企画「花舞殿」が開催された。夜の高舞殿を花と光で彩る中で舞う巫女たちの幻想的な姿は参拝者たちを魅了した。

「神社に参拝して和むだけでなく、これだけ大きな神社や文化があることを見て知って欲しい」と花手水を担当する氏

や手水鉢が共通して使われること、そして、伝統的な慣習や作用ではなく、「美しい」といった感性から取り組める花手水ゆえ、宗派や伝統に関係なく、互いに教えあい、時に連携して新しい行事を行なう。まさに、花手水を介した神仏習合的なつながりが生まれた。コロナ禍では“おうちで花手水”や“花手水ボタンリレー”など、寺社が中心となったオープンなオンラインコミュニティも形成された。一方、地域コミュニティにおいても、花手水を中心とすることで寺社を中心とした新しい連携も生まれている。

花手水は寺社関係者と手水舎というアクターによって始められ、そこに参拝者やSNSのフォロワーという新たなアクターが生まれ、つながっていった。こういったアクターたちのつながりにより、花手水は注目され、さらに他の寺社関係者、メディア、観光会社、地元商店など多様なアクターたちがつながっていく。なかでも、個々の寺社の花手水のアクターネットワーク同士が、#花手水というタグや花手水好きのSNSユーザーたちの投稿、あるいはメディアの記事によってつながっていったことが、このネットワークの急速な拡大、つまり花手水の全国的な広がりを生んだと言えよう。

Callon (2004) は、「人間以外の社会的役割はそれ以上である。社会内の関係を変容させるだけではなく、新しいアイデンティティと新しい集団の出現に貢献する...現実には、それは新しい社会集団、あるいは社会学者が言うところの新しい社会的アイデンティティの創造に貢献したのである」(p.5)と、技術による社会集団の創造を説明している。これに依拠すれ

ば、花手水とソーシャルメディアという技術により、新しいタイプの参拝者やフォロワーたちが生み出され、この新たな集団の思いに寄り添っていく寺社により、花手水という新しいコミュニティが形成されていると解釈できる。まさに、ANTが重視する「異種混交的なネットワークによって生み出された効果」なのである。

6. おわりに

本研究では、花手水という取り組みを通して、つながり(ネットワーク)の生成と発展、そしてそれにより形成されていくコミュニティを考察した。ANTはその名の通り、蟻の如く、小さなつながりを見ることで理解できることがあるという立場をとるが、本研究では手水舎とソーシャルメディアを重要なアクターとして捉えていくことで、ハイブリッドなつながりからコミュニティの形成を理解することを可能とした。Latour(2005)が強調するように、このつながりは連綿と続く。本研究もある時点でのつながりを観察し記述したに過ぎない。今後、この花手水を中心としたアクターネットワークがどのように展開していくのか、継続的な観察が求められる。

注) 本論文は、地域活性学会第13回研究大会にて発表した報告「花手水の事例研究—ポストコロナ社会に求められる寺社の新しい役割」を大幅に加筆修正したものである。

* 挿絵については、全て2021年に筆者撮影

参考文献

- Callon, M.(1986). Some elements of a sociology of translation: domestication of the scallops and the fishermen of St Briec Bay. In J. Law (Ed.), *Power, Action and Belief: a New Sociology of Knowledge?* (pp.196-223). Routledge.
- Callon, M.(2004). The role of hybrid communities and socio-technical arrangements in the participatory design. *Journal of the Center for Information Studies*, 5, 3-10.
- カロン ミシェル(2006)「参加型デザインにおけるハイブリッドな共同体と社会・技術的アレンジメントの役割」(川床靖子訳) 上野直樹・土橋臣吾編『科学技術実践のフィールドワーク——ハイブリッドのデザイン』(pp.38-54) せりか書房.
- 黒崎浩行(2020)「コロナ禍と宗教。感染リスクを避けながら、宗教者は何をしてきたのか。」國學院大学メディア <https://www.kokugakuin.ac.jp/article/186533>
- 公益財団法人全日本仏教会(2020)「仏教に関する実態把握調査(2020年度臨時調査) 報告書」全日本仏教会.
- 小松秀雄(2007)「アクターネットワーク理論と実践コミュニティ理論の再考」神戸女学院大学論集, 54(2), 153-164.
- Latour, B. (2005). *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*. Oxford University Press.
- Law, J. (1986). *Power, Action and Belief: A New Sociology of Knowledge?* Routledge & Kegan Paul.
- 埼玉県神社庁(2020).「コロナ禍における神社実態査の結果」http://www.saitama-jinjacho.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/07/jincho_233_ext_202007.pdf
- Wissink, B. (2013). Enclave urbanism in Mumbai: An Actor-Network-Theory analysis of urban (dis) connection. *Geoforum*, 47, 1-11.